

「教養」と「教養主義」—大学におけるその歴史的経緯

和 泉 司

1 はじめに

21世紀以降の高等教育を含む日本の教育改革の中で、繰り返し登場するのが「教養」という言葉である。今日、文部科学省をはじめ、多くの教育機関、教育者、メディア、そして経済・企業団体までが、「教養」の重要性を主張し、その教育を訴えるようになってきている。

しかしそれは、大学教育の現場において、所与の要求だったわけではない。

高度経済成長期からバブル期につらなる好景気の時代には、大学は「4年間の夏休み」「レジャーランド」と揶揄され、入学は難しく卒業は容易であり、その中ではろくに勉強をしていない、という認識が生まれていた。

その様な時期に起きたのは、現在とは反対の、大学における「教養部」解体であった。1991年の大学設置基準改定により、国立大学の多くが、主として一、二年生を対象に幅広い分野の基礎項目や語学の講義を担当していた教養部を廃止し、早い年次から専門教育を実施することを目標に掲げるようになったのである¹。この時点において、日本の高等教育改革に要求されていたのは、「教養」ではなく「専門性」だったのであった。つまり、それから20年ほどを経て、日本が「失われた20年」とも呼ばれる長期の景気低迷時期に入ってから、「教養」を巡る考え方が大きく変化したことになる。

現在の大学に対する要求は、多くの場合、大学生の就職活動とそれに対する日本国内の企業の要請に基づいていると考えられる。日本の企業において、好景気の時代には機能していた *On the job training* が高コスト化してうまくいかなくなり、即戦力となる人材が求められるようになった結果、大学に対して、就職後に必要となる能力養成が求められるようになった。その際、最も頻繁に取り上げられるのが英語運用能力であるが、それと同時に「教養」という言葉も登場するようになる。

¹ 冠野文「国立大学における教養部の解体 共通・教養科目のあり方をめぐって」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』155号（2001年3月）を参照。

日本経済団体連合会（経団連）は、2015年9月9日付けに発表した「国立大学改革に関する考え方」の中で、以下のように「教養」について触れている。

かねてより経団連は、数次にわたる提言において、理系・文系を問わず、基礎的な体力、公德心に加え、幅広い教養、課題発見・解決力、外国語によるコミュニケーション能力、自らの考えや意見を論理的に発信する力などは欠くことができないと訴えている。これらを初等中等教育段階でしっかり身につけた上で、大学・大学院では、学生がそれぞれ志す専門分野の知識を修得するとともに、留学をはじめとする様々な体験活動を通じて、文化や社会の多様性を理解することが重要である。

また、地球的規模の課題を分野横断型の発想で解決できる人材が求められていることから、理工系専攻であっても、人文社会科学を含む幅広い分野の科目を学ぶことや、人文社会科学系専攻であっても、先端技術に深い関心を持ち、理数系の基礎的知識を身につけることも必要である²。
(下線は引用者による)

ここで言われている「教養」とは、文系・理系双方の基礎知識を意味しているのだろう。しかしそれならば、戦後の教育改革以降、先に述べた「教養部」解体を経た後も、ほとんどの大学で教養系科目は開講され、教育はされてきている。改めてここでそれが強調される意図はなんなのだろうか。

そして、「教養」が大切であるという声明が繰り返される一方で、具体的に「教養」とは何なのか、という点については、きちんとした定義がなされていない。人文社会科学、自然科学の基礎内容が「教養」なのだろうか。しかし、近年、「教養」の科目として、日本語表現や討論等のアクティブラーニングを導入する大学もある。これらを「教養」というならば、それは初年次教育のことを指すのだろうか。

一方で、就職活動の際に用いられる「一般教養」とは、SPI試験に代表されるような、マークシート方式で「正答」を選び出す短答式問題のことを指す。また、書店では、主として歴史・文学の出来事やあらすじを簡略にまとめたり、時事問題や用語の意味を紹介する書籍が、「教養」本として数多く並んでいる。そのような、かつて「雑学」「豆知識」のようにいわれていたものが、「教養」なのだろうか。

現在の日本の大学教育における「教養」という言葉は、定義がはっきりしないままに使われている傾向がある。それによって、不利益を被るのは、当然ながら在籍している大学生である。内実がはっきりしないものを、「必要だ」「重要だ」といって社会（特に企業）から身につけることを要求され、はっきりしない定義のまま「教養がある／ない」と評価されることになり、それで将来を左右される場合さえあるからだ。

² 一般社団法人 日本経済団体連合会公式サイトより引用。 <https://www.keidanren.or.jp/policy/2015/076.html>

大学において、「教養」はどんなものであったのかを、大学と社会がきちんと把握しなおす必要がある。故にここでは、日本の大学における「教養」の歴史を簡単に振り返ってみたい。

2 旧制学校文化としての「教養主義」

日本の学生文化として、「教養主義」の存在がある。これは、明治期以降に日本で整備された帝国大学と、そこへの進学がほぼ約束されている旧制高等学校の学生の中で発生した、学生エリート文化であった³。欧米、日本の古典を読むことが重視され、竹内洋は旧制、新制を含めた大学・大学生の中で発生した教養主義を、岩波文庫主義とも評している。

大正から昭和初期にかけて、植民地を含めた日本各地に9つの帝国大学と48の旧制高校が設置され、さらに官立・私立の大学もできた。女性は基本的に排除されたこれらの高等教育機関において、大正期には「哲学・歴史・文学など人文学の読書を中心とした人格の完成を目指す態度」としての「大正教養主義」が広まり、それは学生間に広まっていたマルクス主義とも結びついた⁴。

1930年代、マルクス主義への弾圧が強まった時期には、東大教授の河合栄治郎が始めた『学生叢書』が教養主義のバイブル化・マニュアル化し、「昭和教養主義」と呼ばれた。大正と昭和の「教養主義」は、古典及び総合雑誌・論壇雑誌の「読書」経験によって形成される文化であり、その読者層は高等教育を受けている／受けた者、つまり大学生か大卒者が中心であった。「読書」という行為を基準にした選別が、「教養主義」の背景にあった。ここでは、昭和前期に大部数を誇った大日本雄弁会講談社発行の『キング』などの大衆・講談雑誌は読書対象にはならず、それらを読むことは「教養のなさ」を指摘するための基準にすらなった。例えば、台湾出身で総合雑誌『改造』の文学懸賞にも入選した龍瑛宗という作家は、台湾で発表した「趙夫人の戯画」（1939年）という小説の中で、日本留学帰りで、遊んでばかりで働かない台湾人資産家の息子を登場させ、その夫の俗物さに幻滅した妻に、夫に対して次のように言わせている。

「あなたは書齋に並んでゐる書物を読まうとしないのね、金文字の美しいご本は、装飾だけなのね、いや、新聞さへ碌に読んでゐやしない、キングや講談雑誌でもいいから、読んだらいいぢやないの？」
「こんどは、あべこべに説教されたね」

「いいえ、説教ぢやないわ、知識階級として必要なんだわ」⁵（下線は引用者）

「書齋に並んでゐる書物」とは、おそらく古典のことであり、「教養主義」に連なるものであろう。それよりは劣る活字メディアとして「新聞」があり、更にその下に「キングや講談雑誌」がある。そして、それすらも「読まない」俗物を描こうというのが、引用部分に現れている。

³ 竹内洋『教養主義の没落』（中公新書 2003年）を参照。

⁴ 竹内前掲『教養主義の没落』を参照。

⁵ 龍瑛宗「趙婦人の戯画」『台湾新民報』（1939年）。引用は『龍瑛宗全集』第1冊（国立台湾文学館 2008年4月）より。

この「趙夫人の戯画」の中には、先の資産家の息子に対置させられる形で、知性と向学心を持ち合わせているものの、貧しく進学が出来ない青年が登場する。そしてその青年は資産家の息子の「装飾」の書物を盗み読む場面が描かれる。「書物」への近接性が、知性、向学心、ひいては人格の高潔さにつながっていく描かれ方がされているのである。

この小説の作者である龍瑛宗もまた、公学校⁶では国語（日本語）をはじめ非常に優秀な成績をとって卒業し、さらに進学を希望していたが、経済的な事情でそれが叶わず、当時の専門学校である台湾商工学校（2019年現在、開南大学となっている）に進学の後、台湾銀行に勤務しながら作家活動をしていた。龍瑛宗の蔵書には、昭和初期に大流行した「円本」全集をはじめ、「教養主義」における「古典」に当たる文学作品が多数あり、それらの読書経験が龍瑛宗の文学観・作家観を形成している⁷。龍瑛宗の小説作品には、能力、人格を備えながら、経済的理由で進学・留学を諦める青年と、その両方に欠けていながら、富裕層であるが故に進学も留学もしている青年とを対置させるものがいくつか存在しており、そこには龍瑛宗自身の進学・留学への憧れが反映されていると思われるが、同時に、進学・留学を果たしながら、「教養」を身につけようとしない富裕層の青年への嫉妬・怨念も垣間見ることができる。そして、龍瑛宗がこのような評価観を身につけたのもまた、「教養主義」の結果なのである。龍瑛宗は、進学・留学が果たせなかった無念を、「教養主義」を身につけることによって晴らそうとし、本来それを身につけているべき「学歴エリート」の「無教養」を批判することで、自分の方こそ進学・留学するにふさわしい人物であることを主張しているのだ。

活字を読んでいるかどうか、そして「何を読んでいるか」によって人を選別する。それが旧制学校文化から生まれた「教養主義」だった。そして「教養主義」を身につけているかどうかによって、人の知性や人格を序列化していく規範となった。

ここですでに、「教養主義」は「人格の完成」から遠く離れてしまっている。そしてその呪縛は、日本人との間の構造的差別に苦しむ植民地社会の中にも浸透し、相互の断絶さえも生んでいた。「教養主義」は、近代以降の学校制度を通じて、日本社会における知性・人格の評価基準となった。学歴だけではすぐれた人物とは言えない。しかし、読書だけでも知性・人格は裏付けられない。双方を備えた上で初めて「エリート」の評価ラインに立つことができ、そこからは、「学校の序列」と「読書量（蔵書量）」によってポジションが定められていくのである。

このような状況を考えると、多様な文化・言説にふれ、経験することを求めつつ、それを単一の尺度として優劣を競うという矛盾を、矛盾と見えなくさせてきたのが「教養主義」であったのではないだろうか。

竹内洋は、この「教養主義」の影響・残滓は1970年頃、高度経済成長が終わり、学生運動の

⁶ 日本統治期台湾における台湾人児童向け初等教育機関。日本人児童向けの小学校とは分離されていた。

⁷ 王惠珍『戦鼓聲中の植民地書寫：作家龍瑛宗の文學軌跡』（台湾・臺大出版中心、2014年）の「第一章 植民地作家的文化素養及其南投時期」を参照。

時代を経て、大学進学率が上がり大学の大衆化が進んだ時期に崩壊したとしている⁸。「教養主義」的な読書や経験を通過儀礼として経たとしても、その後に学歴エリートとしての特権的な立場は約束されていない。「教養主義」による評価にさらされ、受験勉強を続けながら読書や文化経験の競争もこなしてきたにもかかわらず、その評価が自分に有利なものとして返ってこない時代になっていた。ここにおいて、「学生」をはじめとする日本社会において「読書量」が少なくなり、出版物が売れなくなっていく。1990年代までは出版業界を支えていた漫画雑誌や情報誌も、携帯電話とインターネットの普及によって利益・部数共に減らしていった。「読書」の社会的・現実的なメリットを裏支えしてきた「教養主義」の崩壊を考えれば、それはごく当然の帰結だったのである。

3 おわりに

「教養主義」が崩壊しているとして、その後の日本の大学における「教養」が「教養主義」とは異質なものになっているのかというと、やはりそこには大きな影響が残っていると云わざるを得ない。毎年4月前後になると新聞・雑誌や大学周辺の書店が開催するブックフェアやブックガイドで紹介される書籍は、大抵の場合、古典的な哲学、文学などが多くを占めている。また、「どれだけ(冊数・時間)本を読んでいるか」という基準で対人評価を下す傾向も根強く残っている。その際、マンガやライトノベル、エンターテインメント系作品を積極的にカウントすることはない。大学の初年次文化においては、まだ「教養主義」の評価基準が尾を引いているのである。

しかし、近年では、古典を読んでいることを前提とした上で、文化や価値の多様化によって、古典だけではなく、サブカルチャーへの関心を持つことも重要だとされるようになってきている。さらに1980年代以降の海外旅行の自由化、航空券販売の低廉化によって、海外経験の重要性も説かれる。それ自体は社会にとっても学生にとっても有益なことであろうが、学生である期間にそれらをことごとく学び、経験するように求めることで、学生は文化に対する疲弊を感じるようになっていないだろうか。ただでさえ、景気低迷によって、学生の経済力は年々低下しているのが実情であるところに、これらの要求・圧力は非常に残酷ですらある。

一方で、2004年度以降、大学機関別認証評価制度の導入により、20世紀後半時期と比べて大学生の学習時間は増え、単位認定も厳格化が進んでいる。かつて言われた「4年間の夏休み」「レジャーランド化した大学」は、すでに存在していない。それにもかかわらず、日本社会の一定以上の年齢層の人々は、大学生は暇で自由な時間をもてあましていると考えがちである。故に、大学生は、単位とは直接つながらない読書や旅行、課外経験を「教養」のために求められつつ、学習時間を確保しなければならない。そしてそのほとんどの費用を自弁するように求められているのである。

学生に対して、課外の「教養」的経験を要求されるのは、端的に言えば、就職活動において各学生が自らのアピールポイントを持つことが求められるからであろう。民間企業の就職活動にお

⁸ 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』(中央公論新社 1999年)を参照。

いて、学業成績それ自体は評価の対象になることが少ないという。そこで、外国語ができる、海外生活経験がある、様々な文化と交流した、多くの書籍、映画、演劇、芸術作品に触れた、クラブ活動、サークル活動でコミュニケーション能力を身につけた…といった形で、「教養」量の競争が行われる。あえて言えば、ここで「就活教養主義」が発生しているのである。

社会が価値を認めている「教養」は、就職活動のためのものである、と考えるとき、そこにコミットすることが基本的でない大学教員の考える「教養」と決定的に食い違うのもまた当然であろう。このとき、大学と大学教員が取り組むべきなのは、自分たちの「教養」観を正統として「就活教養主義」の誤りを正そうとすること、ではないと主張したい。本稿筆者は、現在の学生や社会にとって、メリットのない「教養」に価値を見出そうとするのは無理であると考えからである。戦前から20世紀後半までの「教養主義」は、メリットを否定することによってメリットを生み出してきた。それは少数者エリートの特権が得られるからこそ意味があった。しかし、現在はそれがない。その矛盾した在り方から脱することを、大学における「教養」は、まず考えなければならぬのではないだろうか。